【♥健康】

研修医ら育てる鹿児島大の新施設

102歳 私の話
あるがまゝ行く

日野原重明

先月、私は鹿児島大学医学部・歯学部付属病院に招かれ、「総合臨床研修センター」の開所を記念した講演を行いました。同センターは、研修医や看護師などの医療関係者が、臨床医学のスキルを学ぶための施設です。

日本の大学付属病院の中で、院内に研修拠点を備えているところは、極めて少ないのが実情です。聖路加国際メディカルセンターでも院内に新たな施設を作る余地がなく、8年前、わずか54平方㍍のスペースに16種の実習機器を備えるにとどまっています。

今回、新設された鹿児島大の研修センターは、私には米国の進んだ大学病院の研修センターと同等と思えるほど、充実していました。たとえば、重症患者の手術で、医師による外科手術操作や看護麻酔師の行動を、隣のマジックミラー室から、20～30人もの医学生や看護学生が一度に見学できるのです。

ところで米国では、眼科でなくても、内科医や研修医が、外来や入院中の患者の眼底を「検眼鏡」という器具で診察します。私が1951年、米国アトランタの大学病院に留学中に、毒性のあるメチルアルコールを飲んで失明した30人ほどの黒人患者が救急入院してきました。内科の主任教授が、患者らの眼底を、当時の最新機器であった検眼鏡でのぞいたところ、眼底の乳頭が薄赤く色づいていたため、教授は「メチルアルコールによる急性中毒」と診断することができました。

教授は自分の検眼鏡を私に貸して下さいました。私は毎晩病棟で、患者さんに「まぶしいですが、どうか私の勉強のため、眼底を見せて下さい」と頼み、練習を重ねました。

鹿児島大の研修センターでは、実際の患者ではなく、特別なセットを用いて眼底を見る訓練ができます。人工呼吸についても、心拍が停止した患者と同じモデルを使い、除細動の電気的ショックの方法が学べます。

鹿児島県は、西日本において最大の離島人口を抱えています。離島住民のためにも、最新鋭の研修センターから巣立つ、医療関係者たちの活躍が期待されているのです。実際、センター長を務める松藤凡先生は週1回、研修医や医学生を伴い、離島への診療を行っているそうです。本当に頭の下がる思いです。

（聖路加国際メディカルセンター理事長）

絵と題字・小田桐昭